

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：君に届け

今回のテーマ

恋愛について考える

I. 恋愛は転移からはじまる

II. 恋愛は人との距離を縮めること

III. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

I. 恋愛は転移からはじまる

転移とは？ 出会いは転移から

精神分析の創始者であるフロイト（Freud,S）がクライアントの治療を通して発見した現象で、過去の重要な対人関係で形成された感情、態度、期待、行動パターンを、現在の対人関係に無意識的に転写すること。

転移は人間の心理として自然な現象である。日常生活のあらゆる対人関係において、程度の差こそあれ転移は生じている。

恋愛のアニメは一般的に転移からお互いに惹かれ合い、恋愛が始まっていく。「君に届け」も同様に、主人公の爽子と風早くん2人の出会いと互いの理解と受容を通じて、両者

の間に転移が生じ惹かれ合っていたのだと考えられる。

陽性転移が起きる中で、爽子は、風早君との同一化が生じ、風早くんに対しこれまで感じたことのない感情から自分自身が作ってきた心の壁が揺らぎ始める。

Ⅱ．恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなることだと感じる。しかし相手と深い関係になれるかは、なかなか確証が得られるものではない。それ故に、相手の一挙手一投足に一喜一憂し、心が揺さぶられる。

風早くんと二人きりになり2人の距離は少し近づいたかと思ったの束の間、クラスメイトから二人の関係を冷やかされ、爽子は傷つき風早くんから距離を取ろうとする。それは彼女自身が今までとってきた、心の防衛機制である。しかし爽子は風早君に対し、ときめいた思いを止められず、苦悩するが何もできないでいた。そこに風早くんが待ち受け、再び関係が再開される。このように爽子と風早君の関係は爽子が風早君と同一化がする中でこれまでにない色々な人との交流が起こっていくが、一方で、様々な人間関係の些細な機微に動揺し、爽子は悩みこれまでの防衛機制を発動し、そこに風早君が気づき彼女に手を差し伸べ関係が保たれ、徐々に2人の距離が近づくということを繰り返している。

そしてその2人に関係性の揺れ動きの中で、爽子は風早君の揺るがない愛を感じ、より自身の感情を深く知り、これまでの殻を破り現実に触れていこうとする。

「君に届け」というタイトルが示唆するように、物語は爽子が自己愛的な殻を破り、特に風早くんとの心理的距離を縮めていく過程を描いている。しかし爽子が風早くんと対等に付き合うには、自身が心の中で抱いてきた理想化した風早くん像を壊し、実際の風早くんの存在を受け止めていく必要がある。それは思春期に再び訪れるエディプス葛藤に向き合い、乗り越えるという意味でもある。

「君に届け」における思春期の葛藤と成長

爽子は風早くんという「良い対象」に支えられながら外的世界との関わりを広げていく。矢野や吉田との友情が芽生え、クラスメイトとの距離も縮まっていくが、そこには思春期特有の葛藤や困難が伴う。

思春期（Adolescence Process）は二次性徴に伴い心身に大変動が生じる時期だ。潜伏期に収まっていたエディプス葛藤が再燃し、アイデンティティが揺らぎ、社会的・家庭的秩序が問い直される。慣れ親しんだ生き方が試される局面である。

この年代の若者は物事を白黒はっきりと二分法的に捉える傾向にあり、自己中心的視点から世界を解釈し、自分の外見に過剰な意識を向け、常に他者からの評価を気にする傾向がある。

爽子もこの思春期的混乱の中で揺れ動いている。周囲を迫害的に捉える一方、親しくなった相手（あやねや千鶴達）を「夢のよう」と理想化する両極端な認識を示す。爽子の持つ防衛機制から自己否定感が強まると他者との距離を取ろうとする動きをするが、風早くんという存在が爽子の内的な「良い対象」として、彼女の心の支えとなることで、なんとか殻に閉じこもることから踏みとどまらせている。

例えば、席替えでも「貞子の近くは避けたい」という雰囲気傷つきながら「いつか『この席になれて嬉しい』って誰かと言えたらな」と願う。それは爽子の心の中の「風早くん」という内的対象に支えられているからこそ、そう感じるができるのだろう。そしてその想いが成就し、風早くんが隣の席を希望し、矢野と吉田も近くに座るという出来事が起こる。

この経験を通して爽子は風早くんへの感情が「憧れも尊敬も飛び越えて」「大好きな気持ち」へと変化していると自覚する。これは単なる恋愛感情だけでなく、主体的に他者と関わりたいという内的変化の表れでもある。やがて彼女の講義ノートが評価されることで、クラスメイトからも受け入れられるようになり、社会的世界が広がっていく。しかし瑣末な噂が広がっていき、爽子と周囲の人たちへの溝が生じていく。

その噂話とは吉田が元ヤンで少年院に入っていた、矢野が色んな技で百人斬りしていると貞子が吹聴しているというものであり、その噂はありもしない噂であるが、「貞子につきまとわれてたら 株を落とす」という話を爽子はトイレで小耳に挟み、自分が本当は矢野や吉田とを傷つけており、いつか風早くんも傷つけてしまうのではないかと自分が周りにいると迷惑になる、離れた方がいいと考え、彼女ならびに風早くんからも再び距離を取

ってしまい、風早くんやあやねや千鶴達との関係もギクシャクしていく。

その異変に気づいた風早くんは爽子を呼び止めたときに声かけたときに爽子は咄嗟に避けてしまい、葛藤する。その苦悩する爽子の姿に風早くんが声をかける。迫害的になり、必死に殻に閉じこもうとする爽子に「俺は.....俺のしたい様にするよ ...噂なんてどーだっていい。俺にとっては俺を見てる黒沼だけが黒沼だ！！」と風早君は言う。この言葉は主体性を持つことの大切さを教え、彼自身が身をもってさし示しているように感じられる。そのやりとりを通じて爽子は再び、距離をとり退避しようという思いよりも、風早くんとそして矢野や吉田と距離を縮め、仲良くなりたいという思いが勝るようになる。こうして爽子は現実に向き合おうという意志を強め、噂に対峙していくのである。

噂との対峙

爽子がトイレにいたときに、大勢の子（A 組の女子達）が入ってきて、貞子には吉田と矢野がバックについているという噂を直接聞き、その噂を話している子たちと対峙するシーンを前回扱った。

そこで明らかになったことは、風早くんをめぐる壮絶な争いであった。A 組の女の子たちは皆、風早君のことが好きで、常に彼の近くにいる爽子に対して嫉妬と羨望の思いを抱いていたと考えられる。彼女らは風早くんが爽子に対して好意を抱いているとは考えたくなく、風早君が優しいから仕方なく爽子の相手をしていると思い込み、爽子がある意味見下すことでこのような噂を作り、それを彼女ら自身も、信じ、溜飲を下げようといっていた節もある。（そしてそれは彼女らが胡桃沢を頂点とする組織の下にいることに甘んじる術であるようにも感じる）そこに爽子対峙するということは彼女が怒りや嫉妬、羨望に向き合うことである。爽子はその感情に向き合うなかで、風早くんの言葉で、噂に翻弄され、疑った友情を再び取り戻し、その感情をより強固なものとし、他者との関係を深めるきっかけを作り出していったと考えられる。

この件で友情を深めた爽子だが、A 組の人たちが、なぜ嫉妬や羨望を抱いているかと言うことについての理解はできていない。そこにはより深い情緒的なぶつかり合いが不可欠になってくると考えられる。それこそが思春期の人間関係の本質を突いていて、この作品

の主題である「君に届け」という心を届けることの難しさと大切さを浮き彫りにしているように感じられる。

そして胡桃沢 梅という男子生徒からの憧れの的の女の子、完全無欠のヒロインと対峙していくことになる→エディプス葛藤への対峙

Ⅲ. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

矢野あやねと吉田千鶴との関係は一旦は近づくものの、色々な噂に翻弄され、彼女らとの関係が一時期ギクシャクしてしまう。しかし風早くんのサポートもあり、爽子は噂元の人達と対峙し、改めて矢野と吉田が爽子にとってかけがえのない存在であることを深く理解し、彼らとの友情はより強固になっていく。

その一連の過程が爽子の人との距離感を巡る葛藤を投影しているように感じられる。今まで殻に閉じこもってきた爽子は矢野と吉田と親しくなり、一旦彼女らとの距離感が近くなる。すると急激に距離が近づいたために、爽子自身 PS ポジションになり、二人への迫害不安や相手への加害意識も出てきてしまい、関係性の維持が怖くなり、自ら距離をとり、元の状態に戻ろうとする。(そこいらの心の動きが、所謂心的平衡なのかもしれない)そこを止めてくれたのが風早くんである。風早くんが爽子の人間関係を巡る情緒的葛藤を受け止めめてくれたことで、矢野と吉田との友情関係が確固としたものとなったと考えても過言でないと感じられる。(その点が竜とそばかすの「U」という潜在空間と違う印象を受ける。)

それから爽子はクラスでの交友関係がひろがり、日々の生活が彩りをもったものに変わっていく。そこで、憧れの風早くんと付き合うようになるまでには、もうひと段落、風早くんとの距離を縮め、彼と対等の関係になっていくことである。ある種それは爽子自身が憧れの中に入っていくことであり、叶わないと感じてきた対象と対等になっていくことである。

それはまさに爽子自身のエディプス葛藤に向き合うことである。

1. エディプス葛藤とは

エディプス期（～6歳）父・母・自分の三者の葛藤：社会性の芽生え

ギリシャ悲劇のエディプス王（父を殺し母と結婚する話）から着想

子どもは異性の親に結ばれたい願望があるが、一方で敵わないとも感じる。

社会性（自分でも母でもない第三者の出現）の獲得と未熟さへの葛藤

→父・母の関係性には叶わないと感じている一方で対等な関係を形成したいと考え、葛藤する心性。

この「君に届け」では爽子は、くるみちゃんに初めて遭遇したときにフランス人形の様だと評し、くるみちゃんから爽子が声をかけられたときに「...なんだか...風早くんみたい.....!」と感じている。そして風早くんとくるみちゃんが談笑している姿は、学年の誰もが似合いだと評し、爽子自身も episode 10で「くるみちゃんがあんまり可愛くて、うらやましくなって 私も可愛くなりたいなあって」感じている。

ここで、風早くんを父、くるみちゃんを母と見立て、同じ様になって、その中に入っていきたいという願望を爽子は感じており、風早くん、くるみちゃんへのエディプス葛藤を抱き始めている。

そこできるみちゃんに対して羨ましい思いを抱く一方で、風早くんに対しても彼の一挙手一投足がこれまで以上にきになり、風早くんの顔を見るだけでも胸が痛いと感じるようになり、憧れから恋愛の対象にシフトするようになっている。

そしてくるみちゃんも風早くんと爽子が話している中に、割って入っていかうとして、くるみちゃんと爽子の距離も近づいていく。そこで、風早くん、くるみちゃん、爽子の三角関係を巡る葛藤が描かれていく。(episode 10.) それはまさにエディプスコンプレックスの始まりである。

2. くるみちゃんとの対峙 エディプス葛藤に向き合うということ

1) くるみちゃんの本心がみえた中での爽子とくるみちゃんの対話

episode 11で爽子は風早くんを意識し始める中で、彼との関係性がギクシャクしてしま

い、一方で風早くんとくるみちゃんの関わりが自然であると感じ、くるみちゃんのことを「カワイイ上にいい人な上にフレンドリー…」と理想化している。しかしその裏には、くるみちゃんに対する強い羨望があるのではないだろうか？

その後、爽子がくるみちゃんに、風早くんとうまく話せない悩み事を打ち明けると、爽子と風早くんはタイプが違うこと、爽子は陰気で、人それぞれ立ち位置があるといい、くるみちゃんは、さりげなく風早くんと爽子は不釣り合いで、自分の方がお似合いだという風にマウントをとっている。そこで爽子は、くるみちゃんと風早くんは仲が良いからと伝え、と、「フツー」とくるみちゃんは謙遜する。そこで爽子は、くるみちゃんですら普通ならわたしなんか緊張して当然かもと感じ、以前の彼女は風早くんと挨拶もろくにできないで、それが普通だったと比べると変わっていること、徐々に距離を近づけていければ、いつかくるみちゃんのように自然になれると希望を抱き始める。このアニメでは、爽子が天然な思考だからくるみちゃんの策略に引っ掛からず、くるみちゃんが悔しい思いをするかの様な形で描かれているように感じられる。

そこには爽子自身が元々、自身も風早くん達のように存在（ある意味、両親の様な存在）に近づきたいという強い欲求を持ち始めたからこそ、くるみちゃんの話聞いて、風早くんやくるみちゃんのような人たちに自分もなれるかもしれないと感じたと考えられる。

くるみちゃんが敵意をあらわにするなかで、くるみちゃんが風早くんに恋愛感情を抱いていることをふと考えた時に爽子自身が風早くんに恋愛感情を抱いていることを知る。

その後、風早くんと爽子の仲を引き剥がそうとする、くるみちゃんの（ある意味、悪意ある）策略が色々行われる。しかし策略はことごとく失敗し、その策が矢野・吉田にわかってしまう。そのことが爽子に知らされ、くるみちゃん自らが、爽子を貶めるために、爽子が矢野・吉田の悪い噂を言っているということを周りに吹聴していたことを開き直って白状する。

そのシーン

くるみちゃん：誤解じゃないよ……。嘘でもなんでもよかったの　2人の悪い噂も爽子ちゃんがいていたことも　流したのはわたしだよ。

爽子：ど...どうして.....

くるみちゃん：.....邪魔なんだもん　爽子ちゃん　ちづちゃんたちや.....みんなと離れちゃえばいいなーと思って

爽子：.....くるみちゃん.....私のこと.....嫌いだったの.....？

くるみちゃん：そうだよ　今頃気付いたの？　「友達」なんて　一度も思ったことない。

その言葉に吉田は憤り、くるみちゃんに怒りをぶつける。

くるみちゃん：やっぱり.....ずるいよ　爽子ちゃん　人を利用して何が悪いのよ！みんなだってわたしを利用していらなくなったらポイってするでしょ！わたしだって利用して何が悪いの！！

こんどは矢野がその言葉に憤り、噂を流している大元が、くるみちゃんであることをバラすと言う。

くるみちゃん：言えばいいじゃん！　言えばいいよ風早に！！

呆然とする爽子

くるみちゃん：.....なによ　いけば？　わたしのこと　ばらさなきゃいけないでしょ？
それでまた風早に同情してもらえばいい。

その後爽子はバラすことを止めてもらうために矢野・吉田に懇願する。そのときの爽子の心情

爽子：.....何でなんであんなこと言うのか わからないけれど あんなの.....本音じゃない
絶対本音じゃない だって すきは人に悪く思われたくないわけじゃないよ....

その後、くるみちゃんの元に戻る爽子

爽子：...やっぱり...まだここにいた.....

くるみちゃん：...なによ...笑いにきたの？ それとも言い忘れた文句？ 早くいえば？

それともまさか同情？.....

爽子：私 風早くんがすき ちゃんと恋愛感情で 風早くんがだいすき さっきは...本
当はそれを言いに来たの くるみちゃんに 言いたかったの？

爽子：友達に言うのって.....こんなにドキドキするんだね...くるみちゃん こんなだったん
だ...ドキドキして.....

くるみちゃん：友達じゃないって...だからあんたと一緒にしないでって...言ってるんじゃ...

爽子：（くるみちゃんの言葉に重ねる様に）緊張しなかった...少し...はずかしくなかった？
.....すこし...うれしくなかった？ 言葉にした時とか 「すき」って自覚したとき

くるみちゃん：...うれしい... ..なんで爽子ちゃんに言ったことでわたしが.....？

邪魔だって 言ってるんじゃない！！何の苦労もなく 風早の周りにいるあんたなんて嫌い
だって 爽子ちゃんが相手なら勝てるって思ったよ！！だってわたしの方が爽子ちゃんよ
りずっとずっと...ずっと.....（切なそうに）風早のことすきだもん 絶対そうだもん

爽子：...私...最初のくるみちゃんよりも 今のくるみちゃんの方がもっともっと可愛いと
思う.....

くるみちゃん：わたしが可愛いなんてわかって.....でも...そんなの意味ないじゃん...風早が
すきになってくれなきゃ意味ないじゃん！！

...しってるよ...風早がわたしのことをすきじゃいのくらいしってる.....ずっと.....ずっとみ
てきたんだから..... なんで戻ってきたの あんたの前で こんな こんな風に泣く...なん

て

爽子：.....くるみちゃんが 風早くんのいいところとか全部しってるから そーいの
くるみちゃんとだったら話し合えるから

くるみちゃん：...あんたなんて...大っきらい...

爽子の思い：くるみちゃんを うらやましかったのは きっと 顔立ちとか雰囲気とかお
似合いだからとかだけじゃない

きっと 風早くんに対するくるみちゃんを 可愛いと思ったから

【考察】

このシーンは「竜とそばかすの姫」のルカちゃんとすずとの会話のシーンを思い出させる。ルカちゃんが完全無欠のヒロインではなく、彼女もすずと同様にコンプレックスを抱えた一人の女性であることを知る。それはすず自身が、抑うつポジションを受け入れつつあり、成熟したからこそ知ることができたと感じられる。と述べた

このエピソードでは風早くんを巡る葛藤からくるみちゃんは化けの皮が剥がれた形になり、「竜とそばかす」の爽やかさに比べて、くるみちゃんはあざとく、醜態を曝け出し、ある種私利私欲の様を見せている。けれども、それであるがゆえに、くるみちゃんが、手の届かないところにいるヒロインではなく、一人の俗世に塗れた平凡な人間であることを表している。そんなくるみちゃんの姿をみた爽子は彼女が自分と同様にコンプレックスを抱え、それゆえに狡猾な手段をつかってしまう、一人の弱い人間だということ知ったのだと思われる。

一般的な作品ではあざとく醜態を曝け出したライバルに主人公は失望し、排除されフェイドアウトされていく印象があるが、この作品では、爽子は風早くんに対するくるみちゃんの一途な思いに共感し、寄り添っている。そしてくるみちゃんが爽子に激しい陰性感情をぶつけても、それを受け止めている。

最後の爽子の言葉が印象的である「くるみちゃんを うらやましかったのは（略）」

きっと 風早くんに対するくるみちゃんを 可愛いと思ったから」

そういう爽子の姿を描くことで、一人の成熟し魅力的な女性へと変化していることを鮮やかに描き出している。